

平成艸紙



おりおりの記

## ビュフェの絵を見ながら

みずほ証券  
取締役社長

本山 博史

ベルナール・ビュフェの「サンフランシスコ」という作品を執務室に掛けている。これは合併記念のお祝いとして弊社に頂いたものであるが、私が初めて訪れた異国の地サンフランシスコ、そしてビュフェとの出会いを思い出させてくれる。

「これは凄い絵に出会ってしまった」、学生時代に訪れた大原美術館で、まさに目が釘付けになり、絵の前から離れることができない程の強烈な印象を受けたことを、今でもはっきりと記憶している。

意外と思われるかも知れないが、私は小学校から社会に出るまで、K先生（故人）の下で水彩画を描いていた。美術の道に進むとか体系的に学ぶというより、先生のアトリエで絵を描いていることが楽しく、描き終えた後の爽快感が、一時の安らぎを与えてくれたからである。先生の教えは、「自由に感じたままを描きなさい」というものだけで、「何を描きなさい」「どう描かなければならない」というものが一切なく、アトリエにある生花やドライフラワー、時には置いてある絵具箱や水差し、中二階への階段など自由に描いていた。出来上ると先生に見て頂き、先生が一ヶ所か二ヶ所筆を入れるだけで、自分の描きたかったものがはっきりと表れてくることも不思議な驚きであった。その先生の口癖が「良い絵をたくさん見なさい」というもので、一人旅の合間に美術館巡りをしたのも、その教え故である。今までに名画との

出会いは多かったものの、冒頭の様な強烈な出会いはビュフェだけである。人物、建造物、静物いずれであっても、吸い込まれそうになるのは何故だろうかと思う。恐らく、ビュフェの生きた時代背景、彼の内面のなせるものだろう。

社会に出てからの私は絵を描いていない。時間がないということにしているが、心の自由、ゆとりがないというのが正直な所かも知れない。その一方、建築家だった父はリタイア後、全国の城から始まり、色々な建造物を好んで描いていた。そして母はここ数年、父の志を継ぐかのように絵筆をとり、樹々を中心に味のある構図で描いている。K先生も父もそうであったが、作品の変遷を見ると、年代を追って絵が穏やかになり、淡い丸みを帯びてくるのが不思議な共通点である。幸い母の絵は生気に溢れ、生命力を感じさせる。そのような作品を見ながら、未だ元気でいてくれそうだと安心している。

